九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

九州大学文学部蔵敦煌文書「新大徳造窟簷計料」探微

馬，徳
敦煌研究院

坂上，康俊
九州大学文学部

https://doi.org/10.15017/1936938

出版情報：史淵. 131, pp.1-22, 1994-03-25. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

九州大学文学部蔵敦煌文書「新大徳造窟簷計料」探微

馬　徳
（坂上康俊訳）

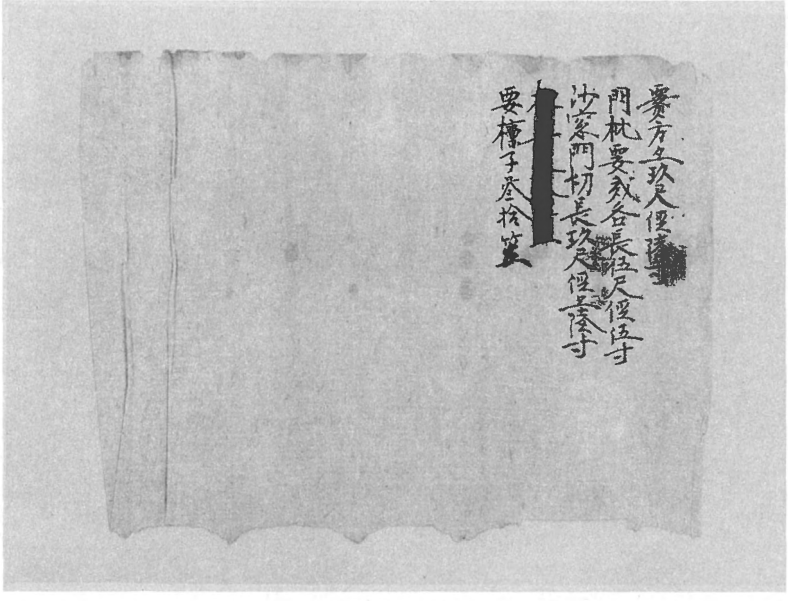
はじめに

一九九二年九月、北京の房山で開催された国際敦煌吐魯番（トゥルファン）学術討論会の席上、現在九州大学文学部図書室に所蔵されている敦煌文書「新大徳造窟簷計料」の内容と若干の問題点が、日本より出席された池田温氏によって報告された。筆者は、その会議に参加されていた恩師姜伯勤先生より池田氏の報告のコピーを頂き、あわせて、当該文書についての研究を委嘱された。筆者は、この文書をめぐる諸問題について、北京外国語学院日本学研究センターの主任になられた池田温氏、および敦煌研究院で長期にわたり敦煌の建築の研究に従事されてきた専門家の孫儒僩氏に幾たびも御教示を仰ぎ、一九九三年三月には莫高窟の現場で詳細な検証を重ね、また幸いにも同僚孫毅華女史の協力をも得ることができた。

その後筆者が、東京芸術大学の平山郁夫学長、澄川喜一学部長のお招きをいただいて、同大学美術学部の客員研究

〔図版1〕

1 新大徳造窟簷計料材木多少起□□
2 大栿要肆、各長壹丈貳尺五寸、径壹丈貳寸、
3 柱肆箇、舊有、　欄額參、舊者堪用、
4 桷栿方子參條、各長壹丈貳尺伍寸、径頭要捌寸、
5 □[栿]子、計要六截、各長壹丈貳尺伍寸、径要捌寸、
6 丞[承]椽方子三片、各長壹丈貳尺伍寸、径要捌寸、
7 丞[承]柱通地枋、長貳捌尺、
8 駞[駝]峰要肆、要楡木壹丈、径陸寸、
9 馬頭肆箇、各長壹丈參尺、
10 要小斗子貳拾箇、計用楡木貳丈、径捌寸、
11 大斗肆、要楡木伍尺、径壹尺貳寸、
12 貼捌箇、各長伍尺、径伍寸、要楡木、
13 花貼要肆、各長參尺五寸、
14 門額方子、要好乾木、長玖尺、闊捌寸、
15 門神方子、亦長玖尺、径陸寸、
16 門枇方子貳、各長捌尺、径陸寸、
17 門眉[楣]參、幷鷄栖一、桑木等不用差、



林崎价男氏撮影

18 南間沙窓額方子、長玖尺、径陸寸、
19 腰要方亦玖尺、径陸寸、
20 南窓門枇貳、各長伍尺、径伍寸、
21 門神玖尺、径陸寸、
22 北邊沙窓額、亦長玖尺、径陸寸、
23 腰方亦玖尺、径陸寸、
24 門枇要貳、各長伍尺、径伍寸、
25 沙窓門切、長玖尺、径亦六寸、
26 （この行塗抹）
27 要標子參拾笙

員となっていた期間中の一九九三年七月、日本文化財保護振興財団の資金援助を受けて東京芸大美術学部より福岡に派遣され、九州大学文学部の坂上康俊助教授の御協力のもと、仔細に原文書を検討することができた。こういう次第で、中日両国の諸先生方、朋友諸兄姉の御努力の積重ねがあって初めてこの一文を草することができたのである。今小稿を公表するにあたり、上述した諸関係団体・部局・諸氏に、衷心からの感謝と敬意を表わしたい。

(一)

「新大徳造窟簷計料」（以下、単に「計料」と略称する）は、原題を「新大徳造窟簷計料材木多少起□□」とするもので、二紙からなり、縦二六センチメートル、接合すれば横七二センチメートルに及ぶ（図版1参照）。文字は片面にしか書かれておらず、第一紙には二二行、第二紙には五行の計二七行にわたって記されているが、そのうちの第26行は、塗抹されている。一行には六字から一九字が記されており、第一紙の第1・5行に若干の欠失があるほかは、基本的に全文が残っているとみてよい。いま写真と録文とを対照し、併せて校勘を加えれば、先の如くである。

(二)

窟簷とは、崖壁に穿れた石窟の前面に建造される木造建築で、石窟の前室の外観を装飾し、前室の空間を拡大するのに用いられる。一〇世紀には敦煌莫高窟では窟簷を修造することが流行し、ひとたびは、千余メートルに及ぶ莫高窟の崖面を、殿堂楼閣のようなありさまに変えた程である。歳月を経るに随って、それらの窟簷の多くは失なわれてしまったが、しかし、今でも崖面上には、当時建てられたままの第一九六、四二七、四三一、四三七、四四四の各石窟、計五箇所の窟簷の実物が保存されてきており、そのうち四箇所は、比較的完型に近い。これに対しては、すでに多くの研究者が、専門研究を行ってきている。[1] しかし、これまでの研究が莫高窟の窟簷にあらわれている中国古代木

造建築を包括的にとりあげる際に依拠してきた主要文献は、宋代初期の元符三年（一一〇〇）に李誡が著した『営造法式』（以下単に『法式』と略称する）であった。従って、「計料」が発見されたことは、この方面の研究にとって、おおいに意義のあることと言わねばならない。

「計料」に記されている窟簷の部材は、基本的には『法式』と同じであるが、しかし、部材の名称については、『法式』や現在中国国内各地で通用している名称とは異なることが多い。これは主として当時の敦煌の方言や俗語を用いたことによろうが、その外にも、細かな部材の寸法や比率の点でも『法式』の厳格な規定とは一致しないという問題がある。その原因はやはり窟簷がすべて石窟の前室や崖面の高低、寛狭、深浅と、人々の活動の実際上の必要に応じて造られたからであろう。

いま「計料」に記されている二七種の部材の名称、数量、寸法を表示すれば、次のようになる。

番号	行	名　　称	数量	寸　法（尺）
①	2	大栿	4	12.5×1.2
②	3	柱	4	
③	3	欄額	3	
④	4	枨栿方子	3	12.5×0.8
⑤	5	柎子	6	12.5×0.8
⑥	6	承椽方子	3	12.5×0.8
⑦	7	承柱通地枋		28
⑧	8	駝峰	4	総計10×0.6
⑨	9	馬頭	4	13
⑩	10	小斗子	20	総計20×0.8
⑪	11	大斗	4	総計5×1.2
⑫	12	貼	8	5×0.5
⑬	13	花貼	4	3.5
⑭	14	門額方子		9×0.8
⑮	15	門神方子		9×0.6
⑯	16	門枇方子	2	8×0.6
⑰	17	門楣	3	
⑱	17	鶏栖	1	
⑲	18	南間沙窓額方子		9×0.6
⑳	19	腰方		9×0.6
㉑	20	南窓門枇	2	5×0.5
㉒	21	門神		9×0.6
㉓	22	北辺沙窓額		9×0.6
㉔	23	腰方		9×0.6
㉕	24	門枇	2	5×0.5
㉖	25	沙窓門切		9×0.6
㉗	27	檩子	30	

この表に示されている部材の名称のうち、『法式』や、伝統的名称とは異なる主なものは次の通りである。

⑨馬頭には、抹角、角梁、陽馬、梁抹、闕角などの別名がある。

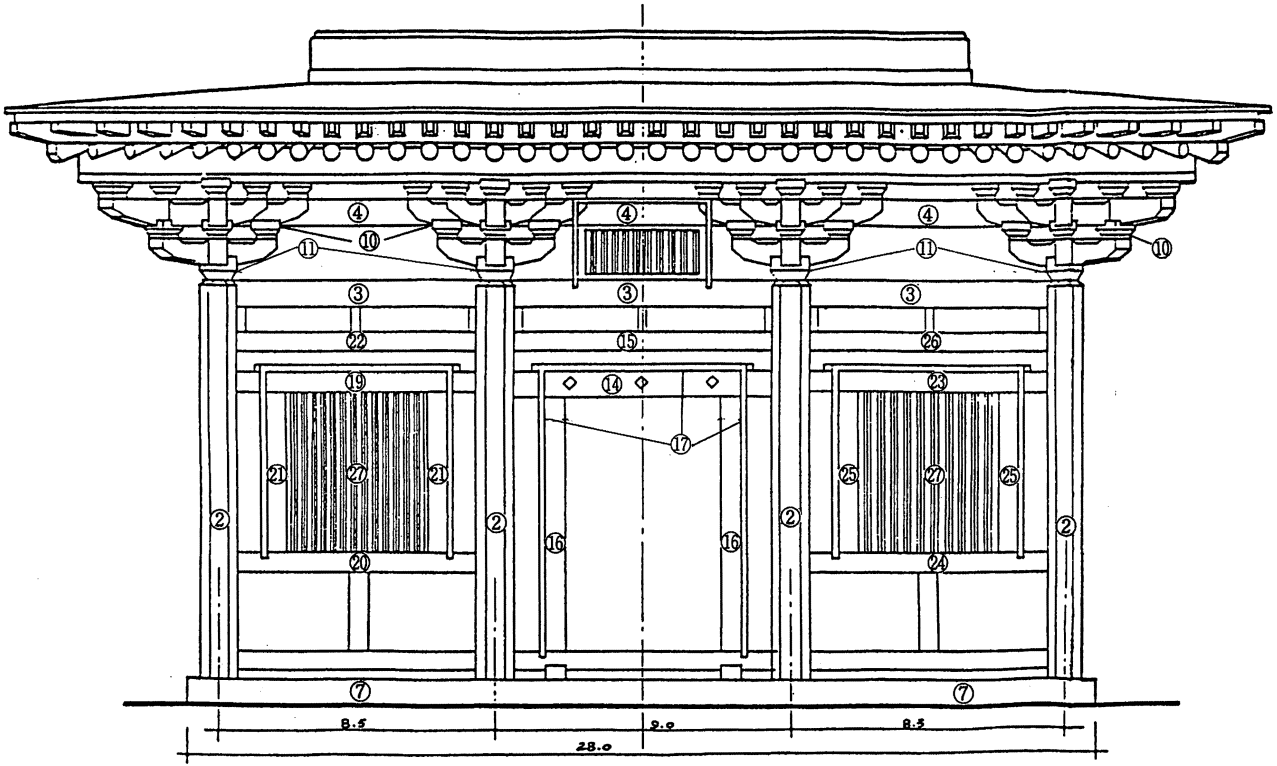
⑫貼と、⑬花貼とは、割牽ないしその類の部材であろう。

⑮門神方子とは、門額の上、欄額の下（門額と欄額の間）にある横額である。窓額と欄額との間の額も、当該文書の中では、門神（南窓の㉒）とか沙窓門切（北窓の㉖）と呼ばれており、現今の由額に当たる。

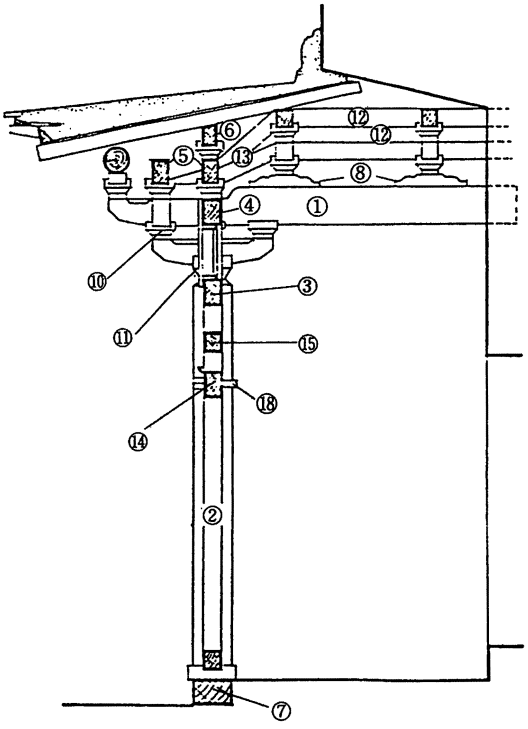
⑯門枇方子とは、門框のことで、窓框のことも当該文書の中では南窓門枇（㉑）とか門枇（北窓の㉕）と呼ばれている。

「計料」に記されている寸法は、唐代の営造尺を用いているとすれば、一尺がほぼ現在の三〇センチメートルにあたる。[2]

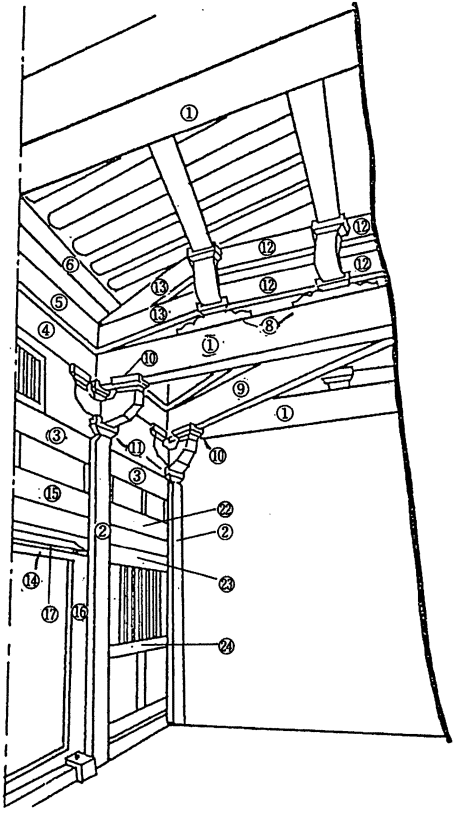
「計料」に記されている窟簷は、四柱三間の間取りで、従来からあったものを修築するもののようである。承柱通地枋の長さ（二八尺）から推測するに、窟簷の正面は幅八メートル余になる。欄額、門額、窓額などの長さから見て、三間の幅としてはほぼ妥当なところであろう。門框の高さ（八尺）に、大斗（大斗）、小斗（小斗子）の部材の寸法等を加えて推算すると、窟簷の高さはほぼ五メートル程度になる。大栿および割牽（貼・花貼）の部材の長さから推算すると、窟簷の奥行きはほぼ二メートル余になる。窟簷の頂部に用いられている細かな部材の数量から推理すると、この窟簷は歇山式の頂部をもち、斗栱は両跳五鋪作のようである。また、「計料」の中には柱を承ける地梁が見出されないことからすれば、この窟簷はおそらく崖前の水平面そのものに直接して建てられていたものとみられる。「計料」の中にはまた、勾欄（てすり）の部材も見出されないが、しかし現存している窟簷および殿堂の遺址を考慮すれば、この窟簷にもやはり勾欄があり、従って、石窟の前の、崖を削って平坦にした台地も、比較的広いものであったと見るべきであろう。以上の検討を通じて窟簷の様相や規模をほぼ明らかに窺い知ることができると思う。



〔図版２〕正面図



〔図版３〕断面図



〔図版４〕透視図

いま、計料に記されている窟簷の細かな部材の寸法や、莫高窟に現存している窟簷の実物から、当該窟簷の復原示意図を描くと、おおよそ先のようなものになろう（図版2・3・4）。

（作図は孫毅華女史。図中の〇で囲まれた数字は、前掲表中の「計料」の部材の番号と同じ。図中の寸法は、「計料」に記された寸法をもとにして、比例計算により求めたものである）

(三)

莫高窟の造営の歴史が我々に教えるところによれば、石窟の前に木造建築を建造することは、一斉に開始されて出来上ったものではないし、また、石窟が造られた時に同時に木造建築が建造されたわけでもない。一般的には石窟の前室はすべて外敞に向かって開かれており、これを窟敞と呼んでいた。[3] もちろん、幾つかの石窟には、その石窟が出来上ると同時に木造建築が建造されており、それはたとえば崖面の底層にある一四八号石窟や、中層にあってもその下の層には石窟の無い三三二号石窟などから、南北の大像のある一三〇号石窟および九六号石窟の前面の楼閣にまで及ぶ。しかし、一〇世紀の初頭に到るまでの莫高窟は、旅行者の眼にはまだ「南北二里、盡くこれ高大なる沙窟なり」[4]と映るような様相を呈していた。

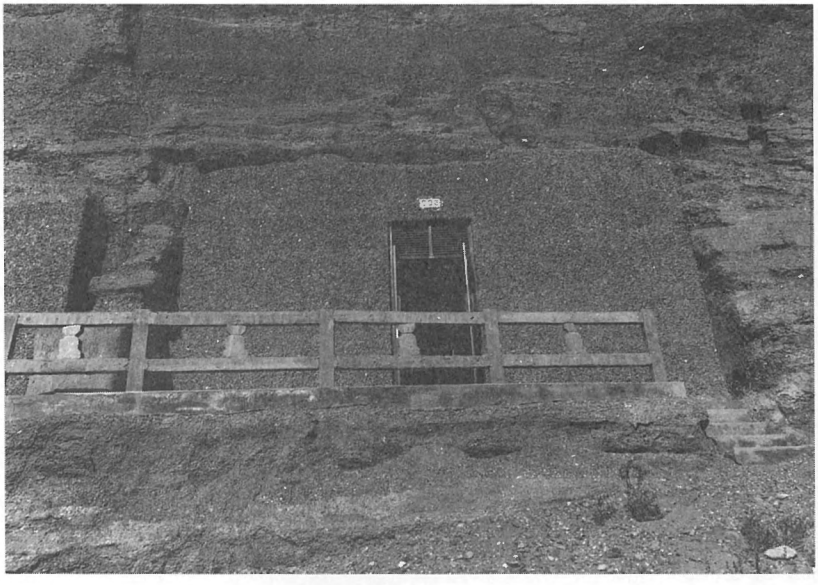
一〇世紀になると、莫高窟の崖面はすでに飽和状態となってしまったので、〝功徳主〟たちは、石窟の前面に木造の窟簷や殿堂を建造することに重点を置くようになった。崖面上に今も残る遺跡からみると、その頃、崖面上にあった石窟の前面すべてに、木造の窟簷と殿堂とが建造されていたらしく、横幅、高さ、奥行きのいずれも一メートルに足りないような小さな仏龕もその例外ではなかった。[5] こういった壮大な工事は、基本的には一〇世紀中に完成したもので、ある木造建築は、わずかなこの期間中に数回も修築されている。敦煌文書の中にも木造建築の造営にかかわる幾つかの記載が、例えば九〇一年の「金光明寺造窟上梁文」（S.3905v）[6]、九三三年の「都僧統建窟上梁文」

（P.3302v）[7]、九四九年の「某氏建窟檐題樑」（S.518）[8]、および九六六年の「重修北大像記」（Ch00207）[9]等のように残っており、疑いもなく「計料」もやはりこの時期に作成されたものと考えられる。

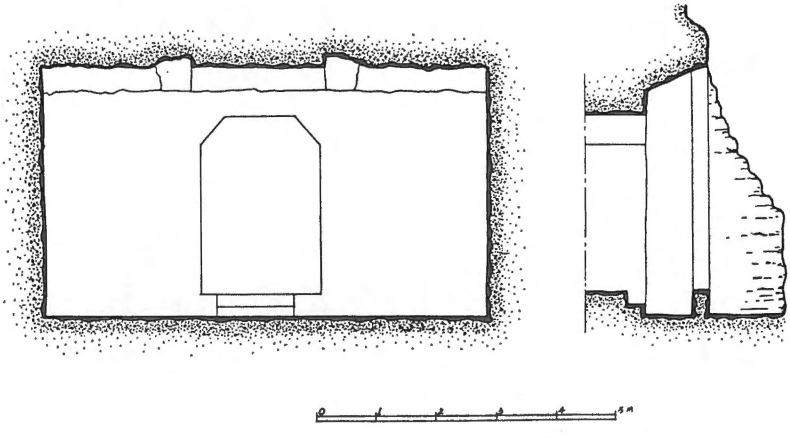
九・一〇世紀以来、莫高窟の造営活動は、いつも〝功徳主〟たちが自分の昇進を慶祝し、記念するために行なわれてきた。「計料」の題目およびその内容から推測するに、この〝新大徳〟なる人物もやはり、いずれかの旧い窟簷を重修することによって、自分が新たに獲得した〝大徳〟の称号を慶祝しようとしたものであろう。しかして、一〇世紀の敦煌の張・曹帰義軍時代、大徳の称号を授けられた僧尼は、文献に見えているだけでも百余人にのぼり、彼らの多くは莫高窟にその足跡を残している。だから、「計料」に見えている〝新大徳〟とは誰であるかを知ろうとすれば、いくつかの方面から検討を加える必要がある。

「計料」に記載されている窟簷の規模は、比較的大きなものである。窟簷の高さは五メートル以上、正面の幅は八メートル以上、奥行きは二メートル以上で、その前面には勾欄を建造するための一メートル程の平坦面がなくてはならない。当該建築物が「窟簷」であって「殿堂」「殿刹」ではないこと、また、奥行きがさほど深くない点よりみれば、この建物が第一層にあったとは考えられない。一方、下層に石窟があるならば、この窟簷の部材に地梁がある筈なのに「計料」にはこれが見えない。とすればこの窟簷が設けられたのは、下層に石窟の無い第二層の石窟でなくてはならない。莫高窟において崖面上に二層以上の石窟があるうち、この当該文書のような窟簷を修造できる条件を備えているところは多くない。

「計料」の記載にふさわしい十数箇所の石窟の窟前の遺跡の調査にもとづけば、筆者は「計料」に記載されている窟簷は、現在の莫高窟第五窟（図版5・6・7・8）の元来の窟簷ではなかったかと推測する。この石窟はもともと曹氏帰義軍第四代節度使の曹元忠執政時代にあたる、五代の後周の顕徳年間（九五四～九六〇）に建てられたもので、窟主は帰義軍節度使の小吏の杜彦弘である。[10] この石窟の前室は、正面の幅が八メートル以上、前室のある台地は奥行

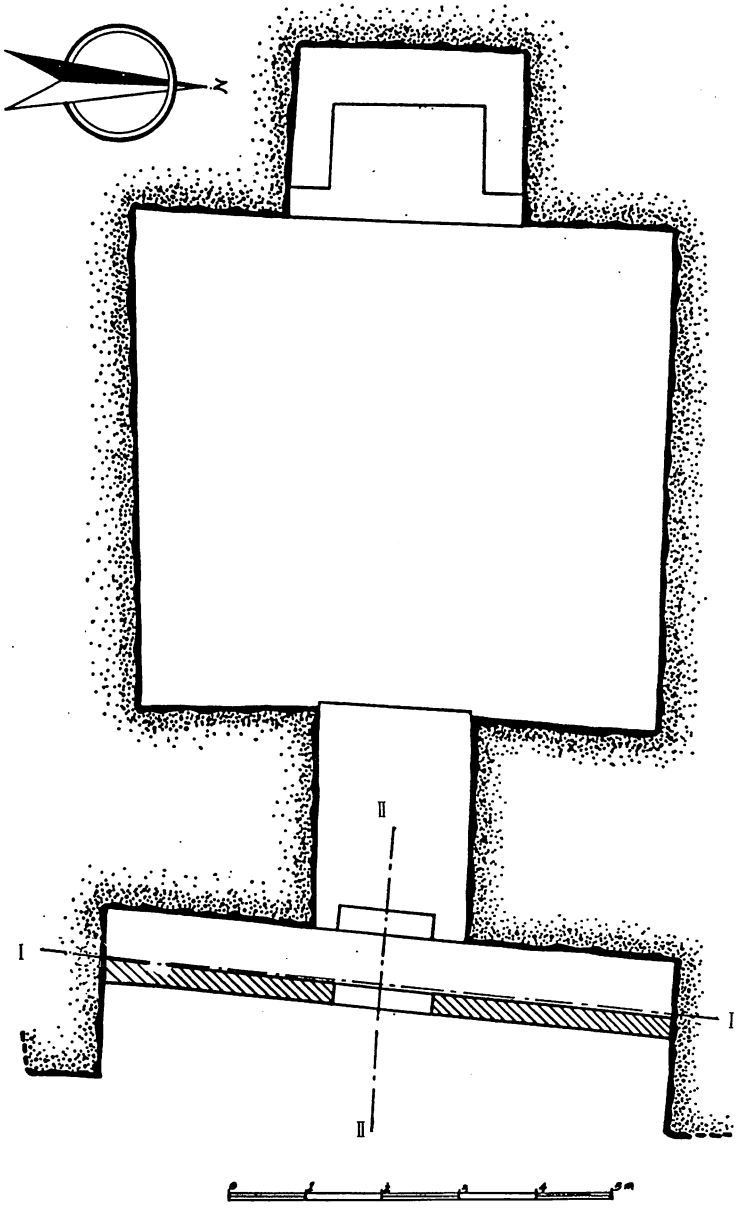


〔図版５〕莫高窟第５窟の現況　巨岩雲氏撮影

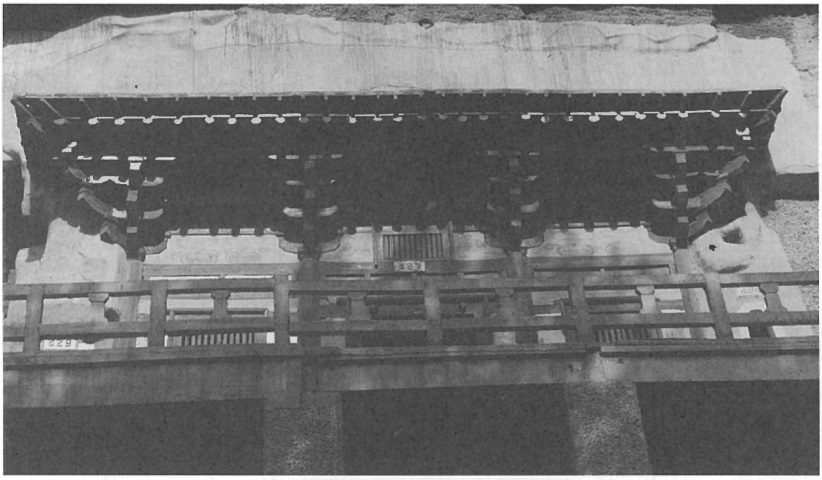


〔図版６〕第５窟断面Ⅰ　　〔図版７〕第５窟断面Ⅱ

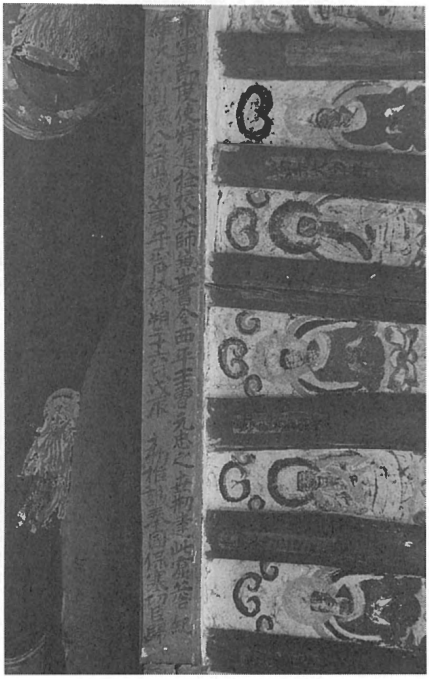
図版６・７・８ともに孫毅華女史作図（1993年10月15日）



〔図版8〕莫高窟第5窟平面図

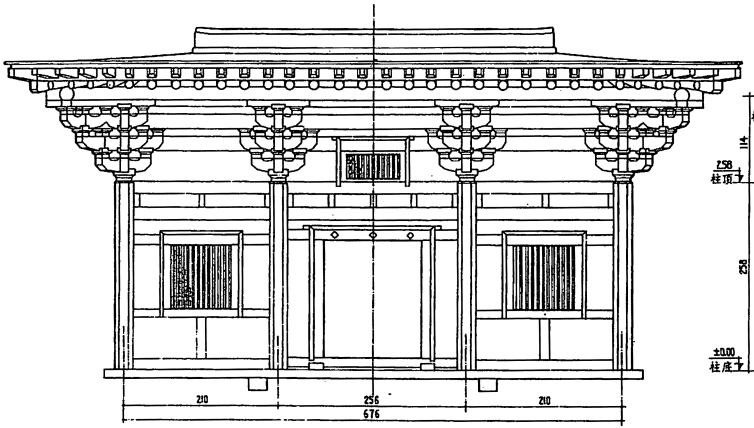


〔図版９〕莫高窟第427窟窟簷の現況　巨岩雲氏撮影

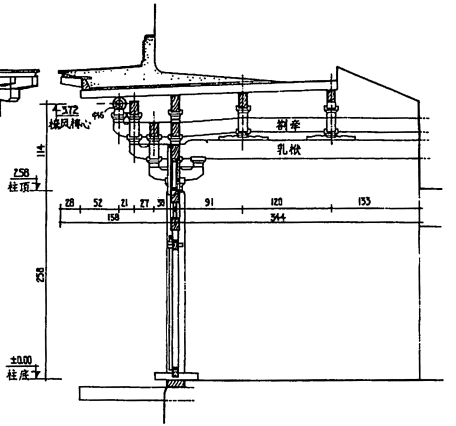


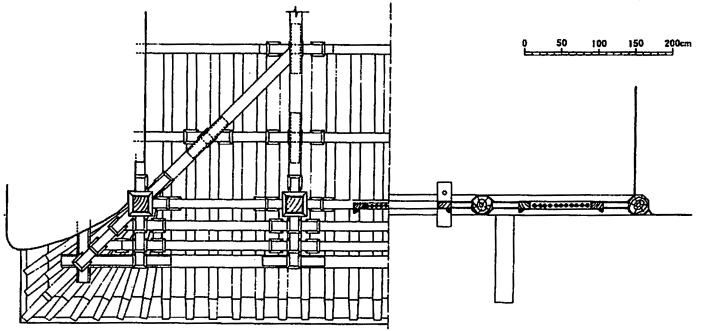
〔図版10〕莫高窟第427窟窟簷題梁墨跡　巨岩雲氏撮影

〔図版11〕莫高窟第427窟正面図　（蕭默『敦煌建築研究』274頁より）



〔図版12〕同断面図





〔図版13〕同平面図

き三メートル以上で、崖壁の上には窟簷の痕跡を今も留めており、大枕を受けるために穿れた孔は、地面から四メートル以上の高さにある。莫高窟に現存している窟簷の遺構の中で、第五窟の窟簷の遺構が、最も「計料」に記すところと合致すると言えよう。

吐蕃・帰義軍時代の敦煌には、数千人の僧尼が居たことがあり、当時の官制に依れば、法律や僧政以上の銜を持つ者は、均しく〝大徳〟と称することができた。杜姓の〝大徳〟は敦煌文書と莫高窟の石窟供養人題記の中にも数名を見出すことができるが、しかし、すべて五代後晋以前（九四七年以前）の者である。だから、今のところ「計料」に記されている窟簷を重修しようと決めた〝大徳〟が誰であるかを知りうる方法は無い。「計料」に記されている窟簷は、莫高窟に現存している九七〇年に建てられた第四二七号石窟の窟簷（図版9・10・11・12・13）と、その構造が基本的に同じとみてよく、ただ規模が第四二七号石窟の窟簷より大きいと考える。従って、「計料」に記されている莫高窟第五窟の窟簷の重建も、九七〇年前後、あるいはこれよりやや後頃と見るべきではなかろうか。

おわりに

「新大徳造窟簷計料」は、一〇世紀後半の敦煌の杜姓の高僧が、莫高窟第五窟の窟簷を造営した際に用いた材木の細かな数量や寸法等を、比較的系統的に記載しており、この窟簷の建築構造と規模を明らかにしてくれるものである。この文書は中国の古代木造建築の細かな部材や構造を具体的に記載しているものとしては、現存最古のものと言ってよく、中国の古代建築研究の空白をある程度埋めるものとして、十分に珍重に値すると言えよう。筆者は浅学菲才の身を顧みず、この文書に関していくつかの議論を展開してみたが、もとよりその趣旨は、磚を抛って玉を引きよせようというものであり、専門家の各位ならびに学界の諸兄姉より御高批、御叱正をいただくことができれば、これにすぎたる幸いは無い。

〔注〕

(1)最も新しい研究成果としては、蕭默『敦煌建築研究』（文物出版社、一九九〇年）を挙げることができる。

(2)梁方仲『中国歴代土地人口統計』（上海古籍出版社、一九八二年）参照。

(3)「莫高窟再修功徳記」（P.2641v）参照。

(4)「敦煌録」（S.5448）参照。

(5)たとえば莫高窟の第一四八窟の下の小龕（第四九三窟）など。潘玉閃・馬世長『敦煌莫高窟殿堂遺址』（文物出版社、一九八五年）参照。

(6)録文は次の通り。

1 □唐天復元年辛酉歳□月十八日金光明寺造

2 窟上樑文

3 和尚□□自述

4 □天修建、無過移石穿山、宕谷先賢石跡、薩訶所

5 記因縁、目慈万聖出現、千仏各坐金蓮、石澗長

6 流聖水、花林寳鳥聲愃、聖跡早晩説盡、紙墨不可

7 能言、猃狁狼心犯塞、焚焼香閣摧残、合寺同心再建、

8 来生共結良縁、樑棟刻仙吐鳳、盤龍乍去驚

9 天、便是上方匠制、直下屈取魯班、馬都料方

10 且空、繩墨不道師難、若得多少功價、

11 □法布施与□修造守注、晝夜不曽睡

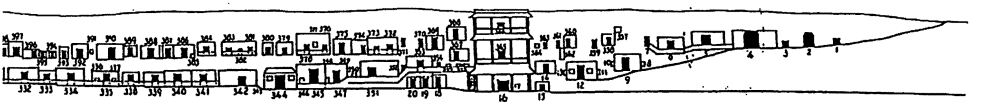
12 眠、道濟□功不下閑言、道政但存身□、

13 不□心□、意中可楽福田、慶達

14 □水一般、寳國不□事口、都

15 □西土、硬學打石穿山、道岸□

16 □、大悲實下造作、價直在弥勒



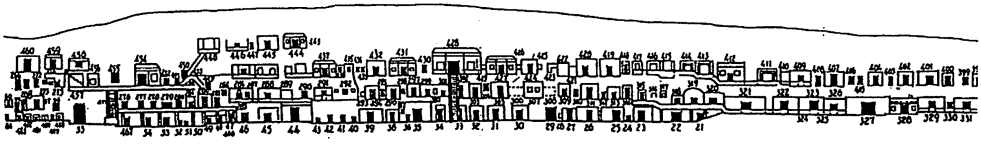
↑
第5窟

〔莫高窟石窟位置図〕孫儒僩氏作図（平凡社刊『中国石窟・敦煌莫高窟』第1巻より）

17 □、大因恰似个病蚖、霊寂交
18 □坐禅、若説兩　勤爛、□□
19 □驢叫一般、今日良辰已至、□
20 □、

（7）録文は次の通り。（周紹良「敦煌文学〝児郎偉〟并跋」〈『出土文献研究』、文物出版社、一九八五年〉参照。但し一部改めている）

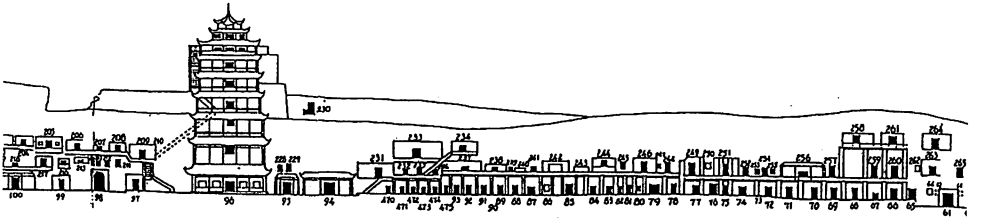
1 維大唐長興元年癸巳歳貳廿四日（月脱）河西都
2 僧統和尚依宕泉靈跡之地建龕一所上
3 樑文　弟子　児郎偉
4 若夫燉煌勝境、地傑人奇、自故崇善、難可
5 談之、古有三崦聖跡、薩訶錫因此資、鴻基
6 始運、察道承乗時、自後先賢碩徳、建立寶殿
7 巍〻、莫不遠覓浄土、即此便是阿弥、厥今
8 大施功者、我都僧統和尚之為歟、伏惟我都僧
9 統和尚、業登初地、徳仰前英、神資天遐、五郡
10 白眉、百金日食、聲播四維、變通有則、妙在
11 心機、故乃聖慈刧遠、像法皆施、會衆生之本意、流
12 名万代之期、選擇形勝之地、湊日即便開基、願
13 得天神助護、聖力可不加威、因資一郡清
14 晏、五老惣今知之、若説和尚功業、難可談量
15 者矣、児郎偉、鳳樓更多巧妙、李都料縄
16 墨難過、剗（斬）截木無弄者、方圓結角、藤蘿
17 栱栭、皇廻軟五、攢梁用柱極多、直向空裏架鏤、
18 魯斑（般）不是大哥、康博士能行斧斤、苦也不得獲
19 玀、張博士不曽道病、到来便如琢如磨、別索煎



20湯煑水、甚人供承得他、張賢面而滿月、諸人不惣莫
21能過、施功縄經半月、樓成上接天河、奉我　和尚
22旨教、今朝賞設綾羅、具述難可説盡、且成後韻之
23科、児郎偉、和尚衆人之傑、多不与時同、忽然設
24其大惠、委令鑿窟興功、宕泉雖有千窟、此窟
25難可擅論、實是顯揚千佛、發暉龍象之容、
26唐押衙一心事辦、不怕你赤熱三冬、海印極甚辛
27苦、四更便起打鍾、調停一鑊餺飥、一杓先入喉中、
28戒德厨營百味、共我和尚心同、董家優婆姨
29福中第一、亦能竭力輸忠、児郎偉、今因良
30時吉日、上樑雅合周旋、五郎(邈)英傑並在、一州士女
31駢闐、饊餅千盤万擔、一時雲集宕泉、盡
32向空中乱撒、次有金銭銀銭、願我十方諸仏、親来
33端坐金蓮、薦我尚和景祐、福祚而海長延、
34應是助修之輩、見世惣獲福田、諸族六親内
35外、永同瑤閣神仙、燉煌万人休泰、五稼豊稔
36龍川、莫在辞多蹇訥、歳時猶望駑還、自
37此上樑之後、高貴千年万年、

(8)録文は次の通り(池田温『中国古代写本識語集録』〈東京大学東洋文化研究所、一九九〇年〉四八九頁参照。なお9行目「此」を、池田は「屯」とする)

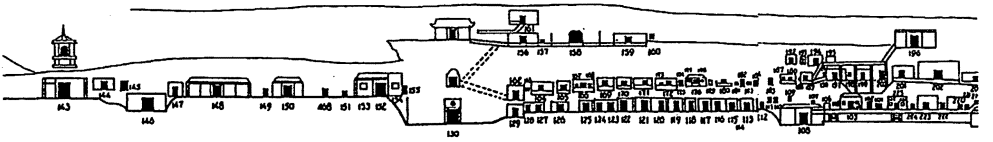
1維大漢天福拾肆年歳次丙
2午八月丁丑朔廿二日戊戌勅
3河西歸義軍節度瓜沙
4等州觀察處置支度營
5田押蕃落等使光禄大夫特



6進檢校太傅食邑壹阡戸
7食實封參佰戸譙郡
8開國侯曹厶之世再
9建此簷記、

(9)録文は次の通り。

1大宋乾德四年歲次丙寅五月九日
2勑歸義軍節度使特進檢校太師兼中書令托西大王曹
3元忠与　勑受涼國夫人潯陽翟氏、因為齋月、届此
4仙巖、避炎天宰煞之悪因、趣幽静禎祥之處善、莫不洗
5心懺滌、心池之慧水澄清、鍊意虔誠、意地之道芽欝
6茂、撥煩喧於一月、繫想念於千尊、龕龕而每爇銀燈、
7光明徹於空界、窟窟而常焚寶馥、香氣遍於天衢、夜奏
8簫韶、楽音与法音竟韻、晝鳴鈴鈸、幽闇之罪類停
9廢、兼請僧俗数人、連簡二十四筒、□於　大王窟内、抄寫大
10佛名経文、一十七寺之中、每寺各施一部、内檀一部、發遣西州所欠佛名、
11誓願寫畢、善事既楽、轉増貪向之心、悪業漸除、不暇修崇
12之志、遂覩北大象弥勒、建立年深、下接兩層、材木損折、
13大王夫人見斯頽毀、便乃虔告焚香、誘諭都僧統大師、兼及僧俗
14官吏、心意一決、更無二三、不経旬時、締構已畢、梁棟則谷中採取、惣
15是早歳枯乾、椽軒乃是、從城斫来、並仗信心檀越、工人供備、
16實是豊盈、飯似積山、酒如江海、可謂時平道泰、俗富人安、
17盡因　明主以陶鎔、皆由　仁君而造化、不唯此際功德、如
18今福田、遍谷而施力施勤、處處而捨財捨寶、将斯勝善、資
19益群生、伏願世界清平、人民楽業、道途開泰、一方無烽燧之害、
20路径通流、七部有穌舒之喜、　大王禄位、年齊龜鶴之年、



↑
第196窟

21福祚長隆、歳等松赤之歳、　夫人仙顔轉茂、芝宮之寵
22爵日新、玉貌恒榮、蘭掖之蔭庥盖厚、次願城隍晏謐、兵甲
23休行、無聞刀斗之聲、永罷鼓鼙之響、春蛩善熟、夏
24麦豊登、東皐廣積於千箱、南亩倍收於万斛、社稷康泰、癘
25疾蠲除、賢聖加威、神龍呵護、然後空飛陸走之類、一切帶性
26之徒、賴此勝因、俱佛成果、故題耳紀、　涼國夫人翟氏自
27手造食、供備工人、其月廿一廿二兩日換柱、材木損折較多、不堪
28安置、至廿三日下手拆、　大王夫人於南谷住、至廿四日拆了、夜
29間　大王夫人従南谷廻来、至廿五日便縛棚閣、上材木締構、
30至六月二日功畢、四日入城、　助修勾當應管内外都僧統辯正大師紫
31賜鋼恵、　釋門僧正願啓、釋門僧正信力、　都頭知子弟虞侯索幸恩一十二寺、
32毎寺僧二十人、　木匠五十六人　塑匠十人、其工匠官家供備食飯、
33師僧三日供食、已後當寺供給、

(10)賀世哲「従供養人題記看莫高窟部分洞窟的営建年代」（『敦煌莫高窟供養人題記』所収、文物出版社、一九八六年）

〔付記〕本稿の主要部分の内容は先に『敦煌研究』一九九三年三期に掲載した同題の小稿と同じであるが、本文の一部を補訂したところがあり、また今回の原本調査の成果を踏まえて釈文の一部を改め、あわせて参考図版多数と参考史料とを加えた。また再校時に馮継仁「日本九州大学蔵敦煌文書所記窟檐的文析与復原」（『文物』一九九三年一二期）に接した。併せて参照されたい。

訳者あとがき

馬徳氏は一九五五年一一月、甘粛省会寧県に生まれ、一九七八年九月、蘭州大学歴史系を卒業、直ちに敦煌研究院に入り、現在は同院の副研究員として、主として莫高窟造営史の研究に従事しておられる。発表された論文のうち主

要なものには、「敦煌廿咏考述」（『陽関』一九八五年三期）、「敦煌陷蕃年代再探」（『敦煌研究』一九八五年五期）、「呉和尚・呉和尚窟・呉家窟」（『敦煌研究』一九八七年三期）「都僧統之〝家窟〟及其営建」（『敦煌研究』一九八九年四期）「十世紀中期的莫高窟崖面概観」（『一九八七年敦煌石窟研究国際討論会文集』所収、遼寧美術出版社、一九九〇年）「敦煌遺書莫高窟営建史料浅論」（『一九九〇年敦煌学国際学術討論会文集』所収、遼寧美術出版社、一九九三年）、「敦煌莫高窟吐蕃・帰義軍時代的営建」（『九州学刊』第六巻第四期、一九九三年）等があり、現在『敦煌遺書莫高窟史料彙識』をまとめられ、出版の準備中である。

訳者は文部省派遣の在外研修員として一九八八年から八九年にかけて、主として北京大学に滞在したが、敦煌を訪れた際に、北京大学中国中古史研究センターの栄新江助教授の御紹介で馬徳氏と出会い、種々御厚誼に預った。一九九三年四月に至り、馬徳氏は東京芸術大学美術学部の客員研究員として来日され、一年間に渉り主として東京で敦煌文書の研究に従事されることになり、今度は日本で旧交を暖めることになった。

さて、九州大学文学部は数点の敦煌文書を所蔵しており、すべて貴重書に指定され、文学部図書室の貴重書室に保管されている。本稿で検討を加えた「新大徳造窟簷計料」は、元来中国哲学史研究室の所蔵にかかり、「支哲―二〇―一〇八」なる架蔵番号が与えられた封筒に入っている。図書室の記録によれば、この文書は一九四九年、田中三男氏より購入しているようであるが、それ以前の伝来経緯は不明である。馬徳氏や馮継仁氏の論文によって当該文書の価値が確認された以上、より適切な修復・保存措置が採られて然るべきように思う。なお、訳文は原文に忠実であることに努めたが、斗栱が本来どういう構造であったかは検討の余地が残っているように思われるし、「計料」には勾欄以外にも軒桁・栱などの屋頂部その他の部材で、記載されていないものがあるので、地梁が記されていないことに立論上どの程度の重みを置きうるか、問題があるように思われることを申し添えておく。

本稿の公表に至るまでには、九州大学文学部の諸先生方、中でも中国哲学史学科の町田三郎教授、東洋史学科の川

勝賢亮教授、美学美術史学科の菊竹淳一助教授、文学部図書掛主任田嶋秀晃氏より御高配、御指導をいただいたほか、本学工学部建築学科の山野善郎助教授、福岡大学の岡藤良敬教授、元九州歴史資料館の渡辺正気氏より助言を賜ることができた。しかしながら全ての文責は馬徳氏および坂上にあることを明記して結びとする。

〔付記〕馮継仁論文（馬徳氏〔付記〕参照）五八頁は、当該文書第27行「櫟」を「椽」の誤り、第5行「□子」を「櫟子」もしくは「槫子」と推測する。しかし、図版1によっても明らかなように、第5行第一字の下半分は「木」ないし「禾」「示」であり、「寸」ではない。また「禾」「示」とした場合に、この字の左側に木篇があったとする想定も無理であろう。従って馬徳氏の釈文のように「柎（棊）」とすることは可能でも、「櫟」ないし「槫」とすることはできない。また、第27行の「櫟子」は、その記された位置からみて窓の部材と見、いわゆる連子（れんじ）と解する方が穏当か。

（三月七日、三校に際して）